核兵器廃絶をめざす富山医師・医学者の会

No. 68 会報

富山市桜橋通り 6-11
TEL　076-442-8000
世話人代表　金井英子

核兵器をなくす運動を日本から世界に

2025 年被爆者の講演のつどいを開催（8/11）

会場となった富山県民会館 304 号室

田中 重光 さん

（たなか　しげみつ）
日本原水爆被害者団体協議会代表委員、長崎原爆被災者協議会会長

日本被団協代表委員・田中重光さんと医学生・石崎明珠さんが講演

当会は 8 月 11 日、ノーベル平和賞を昨年受賞した日本原水爆被害者団体協議会（日本被団協）代表委員の田中重光さんを講師に「被爆者の講演のつどい」を富山県民会館で開催しました。

リハーサル直前、オンラインで講演される田中さんが、長崎原爆被災者協議会の事務所への到着が遅れているという知らせが入り主催者に緊張が走りました。午前に出席していた諫早原爆慰霊祭から帰る途中で線状降水帯に遭遇したとのこと。何とか間に合い主催者一同安堵したという一幕がありました。

田中さんのお話のあと、金沢大学の医学生・石崎明珠さんが、2023 年 12 月にニューヨークで開催された核兵器禁止条約第 2 回締約国会議に参加した感想をオンラインで報告しました。

質疑応答では、貴重な講演に対する謝辞とともに、核廃絶はまず身近なところから始めたいという決意表明など、活発な意見交換が行われました。

（講演の概要、質疑は 2 面以降に）

80 年間の核兵器不使用は被団協の功績

開会挨拶の冒頭で金井英子世話人代表は、「昨年 10 月 11 日、ノルウェーのノーベル委員会は 2024 年のノーベル平和賞を日本被団協に授与すると発表しました。広島と長崎の被爆者たちが耐えがたい肉体的苦痛や辛い記憶にも関わらず、被爆の実態を世界に伝え続ける事により核兵器の使用は容認できないという国際規範が形成され、そして 80 年間核兵器は使用されませんでした。今回その立役者である日本被団協の代表委員である田中重光氏の講演を実現できたのは大きな喜びです。」と述べました。

金井英子世話人代表

● 田中重光さんのお話し、石崎明珠さんの報告、参加者の発言など ……2 ～ 4
● 元 NHK アナ杉浦圭子さんが富山で被爆伝承講話……5
● 県被爆者協議会「広島慰霊の旅2」今回は高校生交流がテーマ……6 ～ 7

「核兵器をなくす運動を日本から世界に」

田中　重光

今年は原爆投下から 80 年目の節目の年。私は当時 4 歳 10 カ月で爆心地から 6 km の自宅の庭で祖父と弟と遊んでいる時、飛行機の音が聞こえ空を見上げた瞬間、長崎の空がピカっと光り、大きな雷が落ちたような爆発音と爆風が吹き荒れました。

幸い家族にケガはなかったのですが、時間がたつにつれリヤカーや大八車、馬車で運ばれてきた重症の人たちで近くの病院の病室がいっぱいになり、空き家、警察、お寺、さらには国民学校に収容されました。午後になって国防婦人会と女子青年団は看護の手伝いに来てほしいと村役場から連絡があり、10 日の朝に母は国民学校に行きました。

毎日何十人も亡くなる地獄のありさま

ひとつの教室に 20 ～ 30 名がいて、皮膚がずるむけ赤く腫れあがって男女の区別もつかない人々。異様な臭いが漂って、これが人間だろうかと思ったそうです。手当てをしようにも医薬品は底をつき、消毒液の代わりに海水を汲んで沸騰させ、やけどの薬には菜種油を持ち寄りました。包帯には古い浴衣を集めました。

母たちの主な仕事は、腐った体に食いついているウジ虫取りと身体に刺さったガラス片を抜くことでした。毎日何十人も亡くなって地獄のようなありさまで、学校の裏山や江戸時代の墓場を掘り起こしたりして埋め、収容された 1780 名のうち約 380 名が 10 日ほどのうちに亡くなりました。

家族を襲った残留放射線の影響

3 日目に母と兄、弟は友人を探すために爆心地を通り、竹の久保（現・長崎市竹の久保町）に行きましたが一面焼け野原で探し出すことができず疲れ果てて帰ってきました。数日たって 3 人とも残留放射線による原爆症の下痢が 1 週間以上も続き、足にできた吹き出物は半年以上治りませんでした。やがて母と兄は肝臓の障害にも悩まされました。相浦海兵団にいた父も救護作業のために 10 日に爆心地に入り、負傷者の救護や遺体の後片付けをして帰ってきましたが、やはり下痢とだるさがひどいと言っていました。

体の不調で苛立ちが強くなった父は、母に暴力をふるい喧嘩ばかりしていましたが母は妊娠しました。夫からの暴力や産んでも栄養失調で死ぬかもしれないという不安で、母は流産しようと大きな石を抱えて水風呂に入り力んだそうです。しかし赤ちゃんの命が勝って、妹は生まれました。現在は長崎被爆二世の会で語り部活動をしています。

そんな父が 1957 年に肝臓がんで亡くなりました。一家の大黒柱を失い、私は学校をやめて仕事に就こうとしましたが、父の上司だった長崎駅長にアルバイトしてでも卒業しなさいと言われ、何とか卒業し国鉄に入りました。弟は集団就職で大阪の自転車工場に就職しました。私は 29 歳で被爆二世の女性と結婚し、男の子と女の子を授かりました。2 人とも結婚しましたが、長男の子は生まれつき知的障害がありました。長女の子は妊娠中に検査で横隔膜欠損がわかり、肺が満足に機能しないため手術しましたが、体温が上がらず 3 日目に亡くなりました。

見捨てられた被爆者、待ち受けていた病と貧困・差別

長崎、広島に投下された原爆は一瞬にして両市を廃墟と化し、数万度の熱線は人々を蒸発させ、あるいは焼き殺し、放射線は体を切り裂きました。広島で 14 万人、長崎で 7 万 4 千人が亡くなりました。その中で広島で 7 万数千人、長崎で 2 万人近くの遺骨は家族や親族に引き取られていません。原子爆弾は人間として死ぬことも拒否するのです。

赤十字国際委員会のマルセル・ジュノー博士は、広島の現状を報告し GHQ に軍医と薬品を送るよう要請しました。しかし GHQ のファーレル准将は、死ぬべきものはみな死んで放射線の影響はないと声明を発表、9 月中旬にはプレスコードを発し原爆被害の惨状を覆い隠しました。そして ABCC（原爆

マルセル・ジュノー
赤十字国際委員会駐日主席代表のスイス人医師。広島の惨状の報告を受け GHQ と交渉。15 トンの医薬品を持ち込むとともに自ら広島で治療にあたった。

プレスコード
1945 年 9 月 19 日に GHQ が発した、新聞・出版・放送・映画等に対し「占領軍に対して不信や怨恨を招く内容」を検閲・統制するための規則。

ABCC（Atomic Bomb Casualty Commission）
広島・長崎の原爆被害者の長期的な健康影響を調査するため、アメリカ合衆国が 1947 年に設立した民間機関。現在は、日米共同の「放射線影響研究所（放影研）」として運営されている。

傷害調査委員会）は、被爆者をモルモット扱いして被爆の影響調査はしても治療は一切しませんでした。日本政府もそれに追随し、被爆者は 12 年間も何の援護もなく見捨てられ、待ち受けていたのは病と貧困と差別でした。

下平さんという被爆者の妹さんは高校生で盲腸の手術を受けました。しかし放射線を受けた体の治りが遅く、中が腐ってウジ虫がわき、「お前はくさか、くさか」といじめに遭い、とうとう列車に飛び込みました。私の中学の恩師の先生も白血病に罹り、原爆資料館の庭で自殺しました。遺書には「核兵器はなくせ、核実験はするな」とありました。

被団協の結成とノーベル平和賞受賞

1954 年、ビキニ水爆実験を機に起こった原水爆禁止運動は、燎原の火のごとく瞬く間に広がり、1955 年に第 1 回原水爆禁止世界大会が広島で開かれ、翌 56 年に長崎に集まった被爆者が日本被団協を結成しました。自らを救うとともに、人類の危機を救おうと誓い合い、核兵器の廃絶と原爆被害に対する国の補償を求めて立ち上がりました。

核兵器廃絶の運動として特に 70 年後半から 80 年代にかけて、核保有国や核の傘にある欧米諸国に繰り返し被爆者の派遣を続けました。そうしたなか国連で核不拡散条約（ＮＰＴ）が採択され、2017 年には 122 カ国の賛成で核兵器禁止条約が採択されました。現在は 94 カ国が署名し、73 カ国が批准しています。

被爆の実相を語り続けた草の根の運動が、原爆を使ってはならないという「核のタブー」を作り、80 年間核兵器は使用されませんでした。しかしいまプーチン露大統領は核兵器使用の威嚇を繰り返し、イスラエルはガザ地区で 6 万人以上を殺し、その半数以上は子どもたちと女性です。この核のタブーが破壊されそうな危機的な状態にあるなか、ノーベル委員会は日本被団協にノーベル平和賞を託しました。受賞後、私はスペイン・フランスに派遣され、スペインのサラゴサ大学では学生たちにスタンディングオベーションで迎えられ、100 人以上が会場に入りきれないのを見てノーベル平和賞の力のすごさを感じました。

日本が核禁条約に背を向けることは間違ったメッセージを送るに等しい

こうしたなか、被爆国の日本政府が核兵器禁止条約に背を向けていることは、核兵器の被害というのはそんなに大したことではないという、間違ったメッセージを世界に送っていることと同じだと思います。

私達、被爆者は最後の力を振り絞って訴えます。核兵器は悪魔の兵器です。人間と共存はできません。核抑止力による安全保障ではなく、相互の信頼に基づく安全保障政策に転換するために核廃絶を前進させていきましょう。

核兵器禁止条約第２回締約国会議に参加して

石崎　明珠（いしざき めい）

全国反核医師の会学生部会の代表として、核兵器禁止条約第２回締約国会議に参加した金沢大学５年の石崎明珠と申します。祖母の父が長崎で被爆していて私は被爆４世になります。また父方の祖父がベトナム人でベトナム戦争に従軍していました。そのこともあって小さい頃から平和や核兵器について興味がありました。

締約国会議に参加した理由は３つあります。まず核兵器をなくすために、ただの学生の私に何ができるんだろうかと思っていたことが一つです。ならば核兵器禁止条約という核廃絶の最前線の場に行って、そこにいる人たちに話を聞くこと。そして日本の若い医学生として考えていることを世界にアピールしていきたいなという思いがありました。

核抑止論を科学的視点から検証

注目すべきは 122 もの市民団体が参加していたことで、この条約は私たちのような市民の声を聞いてくれているなと感じました。またこれまでの核兵器の非人道性を根拠としたアプローチだけでなく、核兵器を科学的視点から検証しようとする動きがあったのも特徴的なことでした。たとえば核保有の根拠としての核抑止論は論理的に正しいのか。科学的視点から検証して論理性が成り立たないことを証明していくというのは、核保有国が言い逃れできない新しい主張だと感じました。

米学生のほとんどが核兵器に反対 !?

いくつか参加したイベントで特に印象的だったのは各国の若者が集まるユースミーティングです。驚いたのは、アメリカの大学生がたくさん参加してい

て、聞いてみるとアメリカの大学生のほとんどの人が核に反対の立場をとっているとのことです。またマーシャル諸島では、現在進行形で私たちと同世代の若者が放射能の影響を受けていると聞いてショックを受けました。

気楽に核を話題にできる空気感を作りたい

ふだん生活している場面で、いきなり政治や核について話しだしたら「ヤバイ奴」みたいに思われがちですが、ここではいろんな国籍や異なる環境で生活してきた人達が、自然体で核廃絶について話し合いができることに感動しました。

私たちは SNS をよく使う Z 世代と言われますが周りをみると政治や環境など社会問題に興味のある人は多い印象です。その点から「核兵器って時代遅れだよね、ダサいよね」と軽やかに話題にできる空気感を作り上げていったらよいと思いました。

会議に参加して変わった価値観

参加して変わった価値観は 3 つあります。

①核保有国が参加しておらず所詮綺麗ごとではないかという気持ちがありました。しかし集まった多くの小国は、今後経済成長し人口が増え、これからの世界を作っていくのです。それがマジョリティになれば現在の大国支配の勢力図を覆していけるのではないかと思いました。

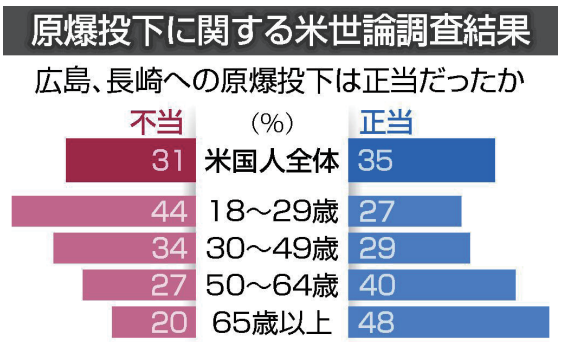
②科学的根拠を重視する新しい視点を加えて、核廃絶に多面的にアプローチできると感じました。

③平和とはたとえばアメリカの若者、パレスチナの、日本の、それぞれの平和は違うかもしれない。それらをよく聞いて考え大事にして、誰も排除されない世界を作ることではないか。自分が大切にしたいことに日々向き合っていれば平和につながるのではないかと今は考えています。

今自分が関心を持っていることに全力で取り組むこと

でも会議に参加していくつか感じた課題もありました。まず言語の壁。ほぼ英語がメインだったので思っていることを 100%主張することは難しかったです。またニューヨーク開催なので行くのに費用がかかり多くの方に援助してもらってやっと行けました。

帰国後の私の活動としては、平和と一口で言ってもいろいろな考え方や価値観があって、今私が関心を持っていることに取り組んでいることも平和に向かった活動だなと自信を持つことができました。



※米ピュー・リサーチ・センターの今年の世論調査結果

図は JIJI.COM ニュース 2025.8.7 配信より

会場の画像は KNB ニュースサイト 2025.8.12 配信より

会場参加者の発言より

朝日町に住んでいます。「日本から世界へ」という演題ですが、私のところでは、わが家から朝日町へ、朝日町から富山、富山から日本、日本から世界へと動いております。うちの奥さんも最初は「なにむずかしいこと言うとんがや」という状態だったのが、なんだかんだ言いながら核廃絶のシールを車に貼ってくれるなど、少しずつ変わってきたなという形です。

朝日町の議会も、以前は不採択だった核禁条約への意見書陳情が昨年 12 月に採択されました。その勢いで、富山県そして日本、世界にと頑張ってみんなで盛り上げていきましょう。

核兵器禁止条約への参加を求める国への意見書 富山県における採択状況

「核兵器禁止条約への参加」とは、日本政府として署名（調印）・批准することを意味しています

2021 年	6 月	黒部市議会
2021 年	6 月	入善町議会
2024 年	12 月	朝日町議会 ※
2025 年	3 月	立山町議会

※朝日町議会では「締約国会議へのオブザーバー参加を求める意見書」が採択された

元 NHK アナ杉浦圭子さんが富山で伝承講話

『核兵器廃絶を市民社会の常識に』7/13 県母親大会で

（すぎうら　けいこ）元NHKエグゼクティブアナウンサー。被爆体験家族伝承者１期生。1958年広島市生まれ。広島女学院中学・高校を経て、早稲田大学第一文学部、日本文学専攻卒。1981年NHK入局後、東京・大阪・広島で勤務。2023年11月末にNHK退職。在職中は被爆二世ということもあり、「ヒバクシャからの手紙」の朗読など、数多くの原爆・平和関連番組の制作に携わる。

７月 13 日、第 64 回富山県母親大会が富山市の県民共生センターサンフォルテで開催され、その記念講演で元 NHK アナウンサーの杉浦圭子さんが被爆伝承講話を行いました。

父親は 13 歳で被爆、熱線を受けた首や肩の皮膚がずるりとむけた

杉浦さんは被爆二世。家族伝承者として父親の清水良治さんの被爆体験を、地図や絵をスクリーンに映しながら語りました。絵は広島の高校生が被爆者の話を聴いて描いたものです。

良治さんは県立広島商業学校（現県立広島商業高校）１年生で、爆心地から２km の校庭で建物疎開の準備中に上空でピカーッと閃光が走りました。とっさに地面に伏せましたが、首や肩に大やけどを負い、皮膚がずるむけになりました。

避難した防空壕でマヨネーズのような白い油を全身に塗り、中心部から 10km 離れた八木・梅林の家をめざして歩き続けました。まだ土地勘のない良治さんを炎とがれきの中を導いてくれた見ず知らずのお兄さんは命の恩人だといいます。

ようやく家に着くと母と祖母が大喜びで迎え、農家だったのでキュウリで湿布してくれ蚊帳で寝かせてもらいました。おかげで火傷にウジが湧かないですみました。家からは遠くでいくつも煙が上がっているのが見え、それは太田川の河原で原爆で亡くなった人の遺体を焼いていた煙でした。

被爆者・沼田鈴子さんのこと

杉浦さんは、講話では必ず敬愛する被爆者の一人・沼田鈴子さんについてふれるそうです。

沼田さんは広島逓信局で被爆されました。左足に大けがをして腐り、麻酔もせずに鋸で切り落とすという手術を受け、婚約者も戦地で亡くしました。海外でも証言活動を一生懸命なさっていたのですが、シンガポールに行ったとき、持っていった折鶴を箱ごと投げ捨てられたそうです。アジアの人々にとって原爆は、戦争を終わらせ日本の占領や支配を終わらせた解放の象徴だったということを知った沼田さんは、それから謝罪の旅を始めました。

韓国の被爆者、日本軍の空爆で大きな被害を出した中国四川省重慶の市民。さらにハワイでは真珠湾攻撃についても謝られました。すると相手からは「あなたも戦争の被害者ですね」との言葉が返ってきました。互いの痛みを理解し合ったうえで初めて「核兵器廃絶のために一緒に努力しましょう」という話になったそうです。

「ヒロシマの羅針盤」

杉浦さんは、どんな相手でも丸ごと尊重する沼田さんのような心の広さ、寛容さが必要だと強調されました。国籍、人種、民族、宗教など関係なく世界中すべての人が同じように大切な存在で、核兵器で殺してよい命などどこにもない。北朝鮮にも中国にもロシアにもない。その「みんな、大切な一人」という考え方に杉浦さんは「ヒロシマの羅針盤」と名前をつけています。

ロシアとウクライナ、イスラエルとパレスチナ。どう戦いをやめたらいいのか、誰がどのように悪いのかもわからなくなりつつあります。相手への差別や偏見、不安や不信感の悪循環から脱し、異なる考えを認め合う平和な世界。杉浦さんはジョン・レノンの「Imagine」の朗読で講話を締めました。（松）

「広島慰霊の旅 2」を終えて

富山県被爆者協議会　会員
中神　匡子

今回は高校生交流がテーマ

2025 年 7 月 26 日、富山県から高校生 5 名を含む 16 名が、広島駅に到着しました。富山県被爆者協議会として被爆地慰霊の旅は、2019 年広島、2023 年長崎に続く 3 回目ですが、今回は「富山県と広島県の高校生交流」という未来に向かう目的が追加されています。

平和公園で広島の高校生と合流

平和公園で広島桜が丘高等学校の生徒 3 名・先生 2 名と合流し、個々に広島平和記念資料館、国立広島原爆死没者追悼平和祈念館を見学。自己紹介の後、

広島の生徒さんから公園内の慰霊碑について作成した資料で説明を聞き、実際に現地を案内してもらいました。

原爆の子の像、原爆供養塔、原爆死没者慰霊碑という広く知られている塔、また、今まで私が知らなかった動員学徒慰霊塔、韓国人原爆犠牲者慰霊碑も教えてもらいお参りできました。

感じたことを絵や言葉で表現

お参りから戻り、広島だからこそできることを求めて青森県から広島に来た先生の指導でワークショップが開かれました。高校生が印象に残ったことを絵に表しコメントを添え意見交換するというもので

す。赤と黒の抽象画で表現したり、「とりはだ」と単語に凝縮したりと感覚の鋭さに驚かされました。

自主性を尊重する広島の平和教育

校長先生からは、討論の授業と「待つ」ことを大切にしているというお話を聞きました。「広島に生まれたのなら平和活動するべき」という義務感から解放し、ディベートにより反対意見を持つ相手の根拠を知る訓練。自分の意志で平和活動に参加するまで待つ。今回の富山県の高校生との交流も 3 名とも自主的に参加してくれたという、うれしいお話でし

た。また、公立学校では８月６日の登校日が廃止されましたが、広島桜が丘高校では毎年、慰霊式典を行っているということです。

二世三世の会中谷さんのお話しを聞く

広島桜が丘高校の皆さんとお別れした後は、広島市原爆被害者の会二世三世部会会長の中谷悦子さん（元教員）のお話を聞きました。広島の教育界では県教育委員会から平和教育に対する締め付けを受けた時期があり、平和教育を受けていない先生が増え、教材作りからやり直したことなど、驚く内容でした。また、シンガポールで開いた原爆展から「加害者に

も被害者にもなりうる自分」を知ることが大切と痛感したお話も印象に残りました。「考える力をつけて、できれば核廃絶を支持してほしい」とのメッセージを受け取りました。

朝礼を終えたばかりの小学校が…

翌 27 日は、平和公園経由で袋町小学校平和資料館を見学。爆心地から 460 mの袋町小学校の遺品、写真の前で言葉なく過ごしました。やはり、現地で 80 年前を想像することは大切だと思います。

今回の高校生と行く慰霊の旅は、当初協力を呼び

袋町尋常小学校は 1937 年（昭和 12 年）に建設された３階建て鉄筋コンクリート造。８月６日、木造校舎はすべて倒壊・全焼、鉄筋校舎も外郭のみを残し全焼。朝礼を終えたばかりの教職員･児童ら約 160 人は全員が直撃を受け、生き残ったのは数人だけだった。2002 年、被爆した校舎の一部を保存し、袋町小学校平和資料館として生まれ変わった。
（サイト「袋町小学校平和資料館」より）

かけた日本赤十字社富山県支部から「政治色がある」と断られ、興味を持ってくれたのにタイミングが合わなかった高校生もいたり、さまざまな障害を乗り越えての実現となりました。賛同いただいた高岡向陵高等学校様、原水爆禁止富山市協議会様、決して楽しい旅ではないのに参加してくれた皆さん、ありがとうございました。よい時間を過ごすことができました。

後列左から５人が富山の高校生たち。前列左から４人が広島桜が丘高校のみなさん。（原爆ドームを背景に相生橋）

本記事の画像は下記ＴＶ番組の映像を使用しています。

（番組名）
KNB news every.
「被爆 80 年　富山県内の高校生
広島で被爆と平和学ぶ」

（放送日）　2025 年８月６日放送

こちらで番組を視聴できます
https://news.ntv.co.jp/n/knb/category/society/knea0d404ce7484aed9e9b2501c6622f58

被爆 80 周年　川崎哲さん講演会

“抑止力”で戦争は防げない 平和の準備を！

実行委員長を引き受けるにあたり川崎氏の著書を１冊買いました。タイトルは『僕の仕事は、世界を平和にすること。』。

お父上が大学の物理の先生で「第五福竜丸」の保存活動に関わっていたこと。川崎氏が中学２年の時、８月６日に広島へ連れて行って下さったという内容が印象に残りました。

私が最も感動したのは非常に平易な言葉で書かれていることです。

「平和とは政治家とか学者とか、あるいは平和運動の活動家が考える問題ではなくて、子どもの時からみんなで一緒に考える問題なのですよ」という強いメッセージが行間から伝わってきました。

ピースボートという奇想天外な活動をされている方の講演を聞くにあたって、私も常識にとらわれず頭を柔らかくして臨みたいと思います。

（実行委員長　金井英子）

お話しする人　**川崎 哲** さん

（かわさき　あきら）

ピースボート共同代表。2017年にノーベル平和賞を受賞した「核兵器廃絶国際キャンペーン（ICAN）」の国際運営委員兼会長（2012～14年共同代表、14年から国際運営委員、21年から会長兼任）。核兵器廃絶日本NGO連絡会の共同代表として、NGO間の連携および政府との対話促進に尽力してきた。ピースボートでは地球大学プログラムや「ヒバクシャ地球一周　証言の航海」をコーディネート。2009～10年、日豪両政府主導の「核不拡散・核軍縮に関する国際委員会」でNGOアドバイザーをつとめた。立教大学兼任講師。日本平和学会理事。2021年、第33回谷本清平和賞を受賞。1968年東京生まれ。1993年東京大学法学部卒業。

日時　**11 月 22 日（土）**
13:30 ～

会場　**高志会館**（パレブラン） カルチャーホール

参加費　協力金 **500** 円

主催　戦争被爆 80 周年記念
川崎哲 講演会実行委員会
※当会はこの実行委員会に参加しています

LIVE 配信
QR コード

視聴申込は不要
後日配信はなし

会費納入のお願い

私たちの会の活動は、会費によって支えられています。活動の基盤となる財政を確保するため、今年度会費の納入をお願いします。

まだ入会されておられず、会の趣旨に賛同し入会を希望される先生は、同封の案内状をご覧のうえ、お申込ください。会費請求の書類をお送りします。

◇年会費　　５，０００円（毎年７月が期首）
◇振込方法　郵便振替または銀行振込

（郵便振替）
同封の振替用紙には口座情報が印刷済です

（銀行振込口座）
富山銀行富山支店
普通預金：０４１７２８９
核兵器廃絶をめざす富山医師・医学者の会

編集後記

●本号編集中に、「広島慰霊の旅２」に新たな写真が加わった。８月 18 日、くだんの高校生らが県庁にて新田八朗知事に面会し、広島訪問で学んだことを報告した。

●唯一の被爆国であるにもかかわらず、広島・長崎以外の地域では平和教育がさほど熱心ではない。彼女らの思いが県民教育のトップである新田知事にどう届いただろうか。（Ｓ・Ｍ）